

松本達郎 (1913-2008)の日本におけるプレートテクトニクス・パラダイム転換への貢献

Contributions of Tatsuro Matsumoto (1913-2009) to plate tectonics, a significant paradigm shift in earth science

*眞島 英壽¹

*Hidehisa Mashima¹

1. 明治大学黒耀石研究センター

1. Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University

海洋拡大説からプレートテクトニクス (PT) 理論の成立期である1960年代から1970年代, 松本達郎 (1913-2009, 当時九州大学層序学担当教授)は日本地質学界において指導的立場にあった。日本の層序学分野におけるPT論に伴うパラダイム転換は, 地向斜論から付加体論への転換に代表される。松本は, このパラダイム転換に関わる国際・国内シンポジウム議長や国際委員, 総合研究代表研究者, 論文集編者などを歴任し, 日本の地球科学を牽引した。四万十帯付加体論は松本が指導した坂井卓を中心として1970年代後半に構造地質的観点から提案された。中世古らによる放散虫研究を最初に評価したのは, 松本が長年指導的立場にあった日本古生物学会である。しかしながら, 松本が自らへの称賛を好まなかったこともあり, これらの貢献は忘れ去られ, 従来の日本におけるPT受容史研究 (泊, 2008)でも紹介されていない。本講演では, 1960~1980年代前半の松本のPT論に関わる研究活動を紹介し, 松本がPT論を通じた地球科学における相互理解と協力関係の実現のため, 最も尽力し行動した人物であることを明らかにする。

キーワード: プレートテクトニクス、松本達郎、パラダイム転換、地向斜、付加体

Keywords: plate tectonics, Tatsuro Matsumoto, paradigm shift, geosyncline, accretional prism